

Title	鉞を担いだ女の神話(再話)の系譜：ハナ・ダスタンとホイッティア, ホーゾン, ソロー
Sub Title	The genealogy of the myth of the white woman with a tomahawk : Hannah Duston and three white male authors
Author	細野, 香里(Hosono, Kaori)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.79 (2024. 3) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20240331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鉞を担いだ女の神話（再話）の系譜

——ハナ・ダスタンとホイッティア，ホーソーン，ソロー

細野香里

アメリカ文学研究における扇情主義は、文学的意義の薄い娯楽作品として軽視される傾向にあった大衆向け作品に見られる特徴とされ、19世紀初めから半ばにかけて隆盛した主に女性の書き手による文学作品の性質を表す感傷主義と比較して大きく取り上げられてこなかった。扇情主義とは一般に、特にジャーナリズムの分野において読み手の関心を惹くために、彼らの好奇心を殊更に煽り虚実の入り混じった語りを展開する姿勢を指す。扇情主義文学は、発信者の不誠実な語りとそれを欲望する読者の共犯関係によって成立するナラティヴとしてみなされた場合、否応なしにネガティブな意味合いを帯びる。けれども、例えば代表的扇情主義文学作品の書き手として知られるジョージ・リップード（George Lippard, 1822–1854）が社会改革運動家の顔を持ち、ベストセラー都市犯罪小説『クエイカー・シティ』（*The Quaker City*, 1844）において上流社会の腐敗と階級問題を描いたように、扇情的語りは、卑俗さの皮を被りながら多数派の驕りを批判し少数派の声を掬い取る方向に機能しうる。扇情主義の観点からアメリカ文学史を見直すことは、デイヴィッド・レナルズの『アメリカン・ルネサンスの底流』（1988）以降長らく続くいわゆる「古典」文学作品の脱中心化の潮流に与し、その豊かな土壌を掘り起こすことにほかならない。本稿では、

アメリカ文学における扇情主義の意義を再検討するための足掛かりとして、アメリカにおける扇情文学の起源とされる“インディアン”捕囚体験記 (Indian Captivity Narrative) と、19世紀の白人男性作家らによるその再話に着目する¹⁾。

巽孝之が喝破するように、インディアン捕囚体験記は、「インディアンを『荒野の悪魔』と見なして撲滅を図る牧師たちの計画どおりピューリタン植民地内部でセンセーションを巻き起こし熱狂的に読まれることになり、今日のメロドラマからホラーに至る煽情文学すべての先駆を成す」(巽『アメリカ文学史』21頁)。インディアン捕囚体験記と称される、ネイティブ・アメリカンに捕らわれた白人(女性)の実体験に基づく物語は、初期アメリカ文学を特徴づける一ジャンルとして認知されている。白人植民者と先住民の対立の中で敵側に拉致された白人女性は帰還後、自身の経験を語り、その物語は多くの場合、聖職者の力添えにより、ピューリタンが教会員として認められるために会衆の前で語った信仰告白、いわゆる回心体験記 (Conversion Narrative) の体裁を取り入れながら広く公表された。代表的な捕囚体験記として、メアリー・W・ローランドソン (Mary White Rowlandson, 1637-1711) の『崇高にして慈悲深き神 (*The Sovereignty and Goodness of God*, 1682) が挙げられる。マサチューセッツ州ランカスターに住む牧師ジョゼフの妻であった彼女は、メタコメット (通称フィリップ) を長とするワンパノアグ族と白人との争いであるフィリップ王戦争 (1675-76) 中の1676年2月にネイティブ・アメリカンによって捕らえられ、5月までの約3か月間捕囚生活を送り、帰還後自身の体験を綴った (Derounian-Stodola et.al. 3-5)。

しかし、扇情文学としての捕囚体験記の特色をよりよく体現しているのは、ハナ・ダスタン (Hannah Duston, 1657-1736?) の物語であろう。彼女は1697年3月15日、乳母のメアリー・ネフ (Mary Neff) とともにネイティブ・アメリカンに拉致される。捕獲者はイギリス人植民者の捕虜あるいはその頭皮にフランス人によって掛けられた懸賞金目当てのアベナキ族の者

たちであった。ダスタンはカナダに連行される道中、生まれたばかりの赤子を捕獲者に殺されながらも、約一か月後には、ペナコック近郊の現在ではダスタン島として知られる島で就寝中の捕獲者の一団を自ら殺害する。そして、斧で彼らの頭皮を剥ぎ、ネフとイギリス人少年サミュエル・レナードソン (Samuel Lennardson) とともに帰還した。さらに同年、捕囚体験について聖職者コットン・マザー (Cotton Mather, 1663-1728) の聞き取りを受けている。マザーはダスタンの体験を信徒への説教で語ったほか、『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』 (*Magnalia Christi Americana: The Ecclesiastical History of New England*, 1702) その他の著作で言及した。以後、子供を殺された報復にネイティブ・アメリカンの頭皮を剥いだダスタンのセンセーショナルな行動は、繰り返し再話されることになる (Derounian-Stodola et.al. 55-57)。ダスタンとローランドソンとの最も大きな違いは、ローランドソンはコットン・マザーの父インクリース (Increase Mather, 1639-1723) の助力を得たのことに推定されているとはいえ、自身の名を冠した著書を世に出すことができたのに対し、ダスタンの場合、捕囚体験を自らの言葉で記録に残すことがなかったという点である (Minter 336-37)。その代わり、コットン・マザーに始まり、19世紀アメリカ文学を代表する白人男性古典作家に数えられるジョン・G・ホイットティア (John Greenleaf Whittier, 1807-92)、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64)、ヘンリー・D・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-62) らによって彼女の物語は繰り返し再話されることとなった。

レスリー・フィードラーは、1968年の著作『消えゆくアメリカ人の帰還』において、アメリカの4つの基本的神話を定義づけている。第一は「森の中の恋の物語 (“*The Myth of Love in the Woods*”）」(50)あるいはポカホンタスとキャプテン・ジョン・スミスの物語、第二は「鉞を持った白人女性の神話 (“*The Myth of the White Woman with a Tomahawk*”）」(51)すなわちハンナ・ダスタンの物語であり、第三はネイティブ・アメリカンのワワタムとの友愛を育んだ毛皮商人アレクサンダー・ヘンリーの時代に遡る異人種

間の「荒野の親友の神話 (“*The Myth of the Good Companions in the Wilderness*”）」(51)、第四はワシントン・アーヴィングのリップ・ヴァン・ウィンクルの物語によって確立された「逃げ出した男性の神話 (“*The Myth of the Runaway Male*”）」(51)である²⁾。新大陸発見以後、アメリカは例えばフィリップ・ハレ (Phillip Galle, 1537–1612) の版画『アメリカ (*America*, 1579)』にみられるように、しばしば武器を持った女性の姿で形容されてきた。ダスタンの物語は、この武器を持った女性というアメリカ国家の自画像の系譜に連なる。ネイティブ・アメリカンの頭皮をはいだダスタンの物語は、その暴力性ゆえ賛否入りまじる反応を呼び起こしながら、アメリカの国家的アイデンティティを語るうえでアメリカ人に強烈なインスピレーションを与え続けてきた逸話の一つであり、この意味で神話と言って差し支えないだろう。そこで本稿では、まず鉞を持った白人女性としてのダスタンの神話的イメージが、ネイティブ・アメリカンの土地収奪を前提としたアメリカ国家建設のイデオロギーにいかに取り込まれてきたかを確認する。そのうえで、ホーソーン、ホイットィア、そしてソローが、いかにダスタンの物語を語り直してきたか、その際に扇情性が彼らの再話においていかに作用していたかを考察する。そして、メアリー・ローランドソンとは異なり、本人による体験記は残されていないために、何よりその扇情性のために、ダスタンの捕囚体験と復讐の記録はそれぞれの時代や語り手自身の要請によって脚色され歪められながら語り継がれてきたことを明らかにする。

1. 武器を持った女の表象の系譜

ネイティブ・アメリカンの頭皮をはいだ女性としてセンセーショナルな注目を浴びることとなったハナ・ダスタンであるが、彼女あるいは彼女の血族はネイティブ・アメリカンによる捕囚という事件以前に、すでに血なまぐさい出来事によって世間の注目を集めていた。1693年、ハナの未婚

の妹エリザベス・エマソン (Elizabeth Emerson) が、生まれたばかりの双子を殺した罪で訴えられ、有罪となり絞首刑に処せられたのだ。その処刑日の説教をコットン・マザーが執り行っている (Derounian-Stodola et.al. 55)。しかし4年後の1697年、より多くの犠牲者の命を奪ったダスタンに対しマザーは、彼女の妹に対するものとは対照的な評価を下す。彼はカナン軍の司令官シセラを殺すヤエルに彼女をなぞらせ、その行いを神の御業として称揚したのである。ネイティブ・アメリカンに捕囚とされるも、自らの手で反撃し逃亡に成功したハナ・ダスタンの物語は、マザーによってピューリタン共同体の信仰と、ネイティブ・アメリカンに対抗しての結束の強化に利用されたのだ。以来ダスタンのイメージは、ライフル銃や斧といった武器を持った女の表象として18世紀から19世紀半ばに引き継がれていった (Namias 30)。極めて興味深いのは、このダスタンに端を発する表象が、18世紀になってから、捕囚体験記の古典であるメアリー・ローランドソンの作品の再版時に適用されている点である。ジューン・ネマイアスが指摘しているように、1770年と1771年のカバリー版、1773年のボイル版のローランドソンの捕囚体験記には、マスケット銃を手にした愛国的な母、フロンティアの戦士の姿の木版画が添えられている (34)。実際にはローランドソンの体験記には彼女自ら銃を構える場面は語られていないにもかかわらず、である。この木版画は、もともと独立革命期の女戦士ハンナ・スネルの肖像として制作されたものであり、それがどういふわけか初版発行から百年近く経ったローランドソンの捕囚体験記の表紙に転用されたのである (巽「環大陸のアメリカ文学史のために」43-44)。独立革命期のアメリカにおいて武器を持った女性は愛国心の象徴とされ、ローランドソンの物語もまたその文脈に利用されたという。すなわち、宗主国イギリスに捕らわれたか弱い植民地としてのアメリカ像から、圧制者からの独立を企てる抵抗者としての国家的イメージへの刷新が図られた際、武器をもって捕獲者に対抗する戦う女性像は、愛国心を煽る有効なイメージとして機能した。このように、女性の暴力性は禁忌とされながらも、時代の要請に応

じて国家の愛国的レトリックに組み込まれてきた。

それでは、19世紀において武器を持った女性ダスタンの物語はいかに語り直されてきたのか。バーバラ・カッターがまとめているように、1698年には「ニューイングランドで最も有名な女性」(14)となったダスタンだが、1703年から1815年にかけて、彼女について言及する記録の数は激減する。しかし1820年代に再び彼女は注目を浴び、1880年代に至るまで児童書、歴史書、伝記、ガイドブックといったあらゆる種類の出版物で取り上げられた³⁾。なぜこの時期に彼女の物語が求められたのか？カッターは、その背景には、西へと拡張し続けるヨーロッパ系アメリカ人と、土地を奪われ追いやられてゆくネイティブ・アメリカンとの衝突、いわゆる「インディアン・プロブレム」があったと指摘する。1820年代、ネイティブ・アメリカンは西漸運動に対する明らかな脅威とみなされる一方で、チェロキー、クリーク、チカソー、チョクトー、セミノール諸部族の人々の土地を奪いミシシッピ以西の居留区へ追いやることについての道義的問題も議論の俎上に上がっていた(Cutter 14-15)。トマス・ジェファソンが理想とした共和制国家を実現するにあたり、国土の拡張には必要不可欠であったネイティブ・アメリカンに対する仕打ちが倫理的に受け入れられるものなのか否かという疑問、「自由のための帝国(“empire for Liberty”)」が抱える自己矛盾は無視できないものになっていた。そんな中「残虐な野蛮人に虐げられた無垢な犠牲者(“innocent victim of brutal ‘savages’”)」としてのハナ・ダスタンの復讐物語は、インディアン・プロブレムと道義的問題の葛藤を抱えた時代の要請に応えるものだった(Cutter 17)。アメリカ国家のアイデンティティは女性的美德と無垢に結びつけてイメージされ、アメリカの拡張運動は純粋な大義に裏打ちされたものであり、それを阻もうとする野蛮なインディアンたちに危機に晒されているとする構図は、アメリカ国家にとって極めて都合の良いナラティヴになり得た。かくして、ダスタンの物語は19世紀初頭から再び頻繁に取り上げられるようになった(17)。ここで神話の意味の一つを、国家や宗教の成り立ちを

語りその権威づけをする物語として定義づけるなら、ダスタンの物語もネイティブ・アメリカンの犠牲を前提としたアメリカの拡張運動を正当化するための神話として利用されてきたといえよう。

ロレイン・キャロルが指摘する通り、例えばメアリー・ローランドソンの捕囚体験記とは異なり、ダスタン自身の手による彼女の体験の一人称の記録は67歳の時にハーバーヒルの教会で述べた短い改心体験を除いて残されておらず、後世の人々はその詳細をコットン・マザーの著作に頼らざるを得ない。この彼女の声の不在こそが、男性作家による語り直しを可能にし、彼女がいかに振る舞ったか、あるいはいかに振る舞うべきであったかが取り沙汰され、さらには国家的レトリックに組み込まれ利用されることとなった (Carroll 60–61)。もちろん、前述したようにローランドソンの捕囚体験記は、別人の戦う女性ハンナ・スネルの肖像を表紙に掲げられるというやり方で、独立の機運を高めるための愛国的レトリックに組み込まれた。しかし、ダスタンの場合は、彼女自身の声の不在によって、カッターが主張するように、拡張運動を正当化する神話として利用された。加えて本論では、ダスタンの体験記は、その扇情性によって、多くの作家たちの語り直しの欲望を掻き立ててきたと考える。次項以降ではホイットィア、ホーソーン、ソーローが、このアメリカ国家の拡張主義を正当化するナラティブとしてのダスタンの神話をいかに再話したのか、その際に扇情性がいかに扱われているかを見てゆく。

2. ホイットィアの「母の復讐」における二重の他者

19世紀ニューイングランドの代表的詩人としてのちに文壇の権威となるジョン・G・ホイットィアは、文学者としてのキャリアの初期において、雑誌編集に携わるかたわらアマチュアの民話学者としても活動していた。彼の「母の復讐 (“The Mother’s Revenge”）」(1831)は、歴史書『B・L・ミリックのハイヴァーヒルの歴史 (B. L. Mirick’s History of Haverhill, Massachu-

setts)』(1832)に寄稿するつもりでかねてから興味があったハナ・ダスタンのエピソードを描いたものである。結局『ハイヴァーヒルの歴史』への掲載はかなわず、彼のその他の詩、散文を集めた1831年の『ニューイングランドの伝説 (*Legends of New England*)』に収録される運びとなった (Arner 20)。

もともと「インディアン・プロブレム」における道義的問題を懸念していたホイットィアは、ダスタンのネイティブ・アメリカンに対する残虐行為を手放しに認めることはできなかったようである。加えて、ダスタンが当時のジェンダー規範から逸脱する暴力的振る舞いに及んだことも彼の態度を硬化させる要因の一つとなっていた。ホイットィアは「母の復讐」冒頭で、女性は元来男性よりも優美で純粋な、いわば天使的な性質をもっているものであるとし、男女の性質の差を強調する。

Woman's attributes are generally considered of a milder and purer character than those of man. The virtues of meek affection, of fervent piety, of winning sympathy and of that 'charity which forgiveth often,' are more peculiarly her own. Her sphere of action is generally limited to the endearments of home-the quiet communion with her friends, and the angelic exercise of the kindly charities of existence. (Whittier 125)

しかし厳しい試練にさらされた際には女性が思いもよらぬ力、つまり彼ははっきりとは述べていないものの、暴力性を発揮することがあるとして、ダスタンの物語を語り始めている。“Yet, there have been astonishing manifestations of female fortitude and power in the ruder and sterner trials of humanity; manifestations of a courage rising almost to sublimity; the revelation of all those dark and terrible passions, which madden and distract the heart of manhood” (125)。そしてやっと、1698年、メリマック

川左岸の美しい集落ヘイヴァーヒルのイギリス人入植地が「インディアンたち」に襲われる場面が描かれる。襲撃を受け、家に赤子と召使の少女とともに取り残されたハナはネイティブ・アメリカンに捕らわれ、彼らの「隠れ家（“lurking place”）」へ引き立てられてゆく（126）⁴⁾。このように、ホイットニアはダスタンの殺人行為が「女性らしさ」の規範から逸脱するものであったことを強調しつつ、彼女にはそうせざるを得ない、やむにやまれぬ事態が降りかかったことを示唆する。

ホイットニア版ダスタンの物語で目を引くのは、彼女がネイティブ・アメリカンによって我が子を殺された際に復讐心を抱く過程が詳細に描かれている点である。生まれたばかりの子供を抱いているダスタンが虜囚の行進についてゆくのに苦心していると、足手まといになっている赤子をネイティブ・アメリカンの一人が不意に取り上げ、その足をつかんで頭を木に打ち付ける。ホイットニアは乾いた落ち葉に子どもの脳と血が飛び散る様子を鮮烈に描く。“The savage held it before him for a moment, contemplating, with a smile of grim fierceness the terrors of its mother, and then dashed it from him with all his powerful strength. Its head smote heavily on the trunk of an adjacent tree, and the dried leaves around were sprinkled with brains and blood”（127）。この余りに衝撃的な出来事について、ダスタンはのちに「すべてが暗闇と恐怖に覆われ、心臓は鼓動をやめて胸の中で冷たく死んだように横たわり、手足は言うことを聞かない機械のようになら動かなかった（all was darkness and horror — that her very heart seemed to cease heating, and to lie cold and dead in her bosom, and that her limbs moved only as involuntary machinery）」と回想したとホイットニアは語る（128）。

しかしそのすぐあとに、ダスタンの心に「新たな恐ろしい感情（“a new and terrible feeling”）」、すなわち強烈な復讐心が芽生えたと述べる。

... when she gazed around her and saw the unfeeling savages, grinning at her and mocking her, and pointing to the mangled body of her

infant with fiendish exultation, a new and terrible feeling came over her. It was the thirst of revenge; and from that moment her purpose was fixed. There was a thought of death at her heart-an insatiate longing for blood. It was the thirst of revenge; and from that moment her purpose was fixed. (128)

この復讐心は彼女の性質を歪め、天使を悪魔にしてしまったというのがホイットニアの主張である。“An instantaneous change had been wrought in her very nature; the angel had become a demon, and she followed her captors, with a stern determination to embrace the earliest opportunity for a bloody retribution” (128)。カッターは、ホイットニアはネイティブ・アメリカンによる子殺しを強調することで、ダスタンのその後の残虐行為を、子供を殺された母親の復讐心による一時的な、そして事の成り行き上当然のものとし、女性らしさの規範からの逸脱行為のタブー性を和らげようとしていると指摘する。そして「処女地を守ろうとするアメリカ国家を無垢な子供を守ろうとする母親像になぞらえる文化的コンテクスト (“[t]he cultural resonance of outraged motherhood, the symbolic link between the mother’s attempt to protect her innocent child, and Americans attempts to protect their ‘innocent nation’”)]」によって、「インディアン・プロブレム」における道義的問題を訴えていたホイットニアは、ここではネイティブ・アメリカンを野蛮人として、彼らに対する暴力を「母親の復讐」として正当化する言説に与していると論じる (Cutter 20)。ネイティブ・アメリカンの家族を殺害する最中、ダスタンが「彼にも母親がいるのだ」と考え男の子を見逃したという脚色からは、確かに母親の情けの強調によって上記の戦略の効果をより確かなものにしようとするホイットニアの意図を読み取ることも可能だ。12人のうち10人の命を奪ったあと (1人はひどい傷を負いながらも逃げ延びた)、最後に眠る少年を前にハナは、ためらいを見せる。“‘It is a poor boy,’ she said, mentally, ‘a poor child, and perhaps he has a mother!’ The thought of

her own children rushed upon her mind, and she spared him” (Whittier 130)。カッターの主張に則れば、「母親の復讐 (“The Mother’s Revenge”）」というタイトルが端的に表すように、ホイットティアは、「インディアン・プロブレム」における道義的問題に対する国家的・個人的葛藤を、母性という切り札によって解決しようとしたということになる。すなわち、母親の復讐を果たすためのネイティブ・アメリカン殺しは正当化できると語ることで、無垢な国家アメリカの領土拡大のための同時代のネイティブ・アメリカンに対する土地収奪の問題も不問に付すことができるとしたのである。

とはいえ、ダスタンの復讐劇は、まさに悪魔の所業というにふさわしい凄惨さである。夜、ネイティブ・アメリカンらが寝静まったのを見計らったダスタンは、最初の犠牲者の頭に斧で一撃を加えると、粛々とその動作を次の標的に対して繰り返してゆく。

Placing a hatchet in the hands of her fellow captive, and bidding her stand ready to assist her, she grasped another in her own hands, and smote its ragged edge deeply into the skull of the nearest sleeper. A slight shudder and a feeble groan followed. The savage was dead. She passed on to the next. Blow followed blow, until ten out of twelve, the whole number of the savages, were stiffening in blood. One escaped with a dreadful wound. (129)

植民地時代の過酷な環境を生きていたとはいえ、ホイットティアが冒頭で述べていたように、捕囚体験までは「家庭的愛情 (“the endearments of home”）」(125)の領域しか知らない女性であったはずのダスタンは、彼女にできるとは本来想定されていなかった殺人行為を一度ならず、10人の命を奪うまで繰り返す。ホイットティアはこれをダスタンの母性と、母性ゆえの復讐の苛烈さゆえと一応は説明するわけであるが、そこには、白人男性であるホイットティアによる、ダスタンという女性の二重の他者化行為が

見て取れる。聖なる母として称揚することも、血に飢えた鬼女として蔑むことも、ともに女性を特定の型に当てはめる行為である。ホイットィアがネイティブ・アメリカンへの暴力行為の正当化のためにダスタンの母性を切り札に使うとき、彼は必ずしもダスタンを自分たちの側——すなわち白人男性が指揮する国家の一部とみなしてはいないのではないか。むしろ、彼女は斧で人を殺めその頭皮を剥ぐという、白人が恐れるネイティブ・アメリカンの行為を踏襲したことで、女性としての規範のみならず、西洋白人の規定するいわゆる「野蛮」と「文明」の境界を侵した疑似的人種的他者となった。そして、ホイットィアが利用したのは、免罪符としてのダスタンの「母性」ではなく、この扇情的な二重の他者としてのダスタンにはかならない。ネイティブ・アメリカンへの暴力を母の復讐として正当化しながら、同時にその暴力の行為者を自らとはかけ離れた存在と位置付けることで、その罪への国家的加担、あるいは責任の所在を曖昧化している。この意味で、ホイットィアの「母の復讐」は、ネイティブ・アメリカンによる子殺し、そしてダスタンによるネイティブ・アメリカン殺しという血なまぐさい扇情的なエピソードが、いかに国家的葛藤の解消法として利用されているかの典型例といえるだろう。

3. ホーソーンの「ダスタン一家」——命を守る父と命を奪う母

ナサニエル・ホーソーンは、1830年代から40年代にかけて各種雑誌に「ぼくの親戚モリス少佐 (“My Kinsman, Major Molineux”）」(1832), 「若きグッドマン・ブラウン (“Young Goodman Brown”）」(1835), 「あざ (“The Birthmark”）」(1843) など短編小説を発表していた。その傍ら、1836年から月刊誌『面白くて役に立つ知識についてのアメリカの情報誌 (*American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*)』の編集職を務めていた際に執筆したのがダスタンに取材した短編「ダスタン一家 (“The Duston Family”）」である。同誌の出版人であったサミュエル・G・グッドリッチ (Sam-

uel G. Goodrich) の依頼を受け、彼がペンネームで著した『ピーター・パーリーの世界の歴史を子供たちに伝える方法 (*Peter Parley's Method of Telling about the History of the World to Children*)』(1832) に掲載されている木版画「ダスタン一家の逃避行 (“The Escape of the Duston Family”)」をもとに執筆し、1836年5月号に掲載された。彼は本作執筆にあたり、コットン・マザーの『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』、歴史書『B・L・ミリックのヘイヴァーヒルの歴史』などを参照したと考えられている (Cohen 236-37)。

ホーソンは「ダスタン一家」冒頭部分において、ハナではなく夫のトマス・ダスタンに焦点を置いている。マサチューセッツ湾植民地の「善男 (“Goodman”)」ダスタンと、8番目の子供を一週間前に出産したばかりの妻の住む集落が、突如闕の声を上げるネイティブ・アメリカンの集団に襲われる場面がまず語られる。ダスタン氏は銃で応戦しながら7人の子供を守り抜くも、やむを得ず産後間もない妻と赤子、乳母のメアリー・ネフをネイティブ・アメリカンの手に落ちた家に置いてきてしまう。このあと、視点は敵襲に遭い捕囚とされた妻ハナに移る。マザーの『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』、ホイットティアの「母親の復讐」でも、まずダスタン氏がライフルで応戦し7人の子供たちとともに逃げおさせたことが語られてはいるが、ホーソン版では家族を守ろうと奮闘し、家に取り残された妻と赤子の運命を天に任せ上の子供たちとともに逃げるべきかどうか悩む男の葛藤がより強調されている。

[I]f ever a poor mortal was in trouble, and perplexity, and anguish of spirit, that man was Mr. Duston! He felt his heart yearn towards these seven poor helpless children, as if each were singly possessed of his whole affections; for not one among them all, but had some peculiar claim to their dear father's love. . . . Goodman Duston looked at the poor things, one by one ; and with yearning fondness, he looked at

them all, together; then he gazed up to Heaven for a moment, and finally waved his hand to his seven beloved ones. ‘Go on, my children,’ said he, calmly. ‘We will live or die together!’ (396)

前述のホーソーンの「ダスタン一家」執筆のきっかけとなった木版画「ダスタン一家の逃避行」が、ネイティブ・アメリカンの襲撃から逃れようと馬にまたがり振り向きざまに銃で攻撃を加えている男性を中心に据えていることから、ホーソーンの語り直しが、とりわけ冒頭部分において夫トマスに焦点を置いているのは、彼の意図というよりもこの木版画に忠実であろうとしたためと考えることも可能であろう⁵⁾。しかし後述するように、子供の命を守ろうと苦闘する父親と、子の命を奪われたがゆえに人を殺める母親という対照的な夫婦の行動を、ホーソーンは物語結末部でも強調する。

ハナ・ダスタンらが家から連れ出される際に、泣き声を上げた赤子をネイティブ・アメリカンの一人が奪い、木にたたきつけて殺害するという事の成り行きについては、ホーソーンは先行するダスタンについての逸話をなぞる形で語っている。そして、彼女の心に復讐心が芽生えたのはこの瞬間であったらうと述べる。“In an instant, an Indian seized it by the heels, swung it in the air, dashed out its brains against the trunk of the nearest tree, and threw the little corpse at the mother’s feet. Perhaps it was the remembrance of that moment, that hardened Hannah Duston’s heart, when her time of vengeance came” (396)。このように、ダスタンの後の行動の理由付けともなる復讐心の芽生えを描くという点はホイットィアの語りを踏襲しているものの、ネイティブ・アメリカンの家族に手をかけたハナ・ダスタンに対するホーソーンの描写は手厳しい。ダスタンがネイティブ・アメリカンの少年を見逃したことを語るにしても、ホイットィアが強調した母親の情けには触れることなく、それどころか彼はダスタンを「怒れる雌虎 (“the raging tigress”）」と呼び、「ハナ・ダスタンが怒り狂った

時、赤い肌の者たちの安全は保障されていない（“There was little safety for a red skin, when Hannah Duston’s blood was up”）」と述べている（397）。

加えてホーソーンは、ダスタンの体験談を世に広め称揚したコットン・マザーに対しても辛辣な目を向け、彼のことを「老いた冷酷な学術的偏屈者（“an old hardhearted, pedantic bigot”）」（396）と呼ぶ。さらに、ダスタンが復讐を実行に移そうとネイティブ・アメリカンの家族が寝静まるのを待ち、ついに機会を掴む場面でも、マザーによる『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』での表現を引用し、ダスタンとマザーの二人が共犯関係にあるかのように描いている。

The night wore on; and the light and cautious slumbers of the red men were often broken, by the rush and ripple of the stream, or the groaning and moaning of the forest, as if nature were wailing over her wild children; and sometimes, too, the little red skins cried in sleep, and the Indian mothers awoke to hush them. But, a little before break of day, a deep, dead slumber fell upon the Indians. ‘See,’ cries Cotton Mather, triumphantly, ‘if it prove not so!’

Uprose Mrs. Duston, holding her own breath, to listen to the long, deep breathing of her captors. (Hawthorne 397; emphasis added)

But on April 30, while they were yet, it may be, about an hundred and fifty miles from the Indian town, a little before break of day, when the whole crew was in a dead sleep, (reader, see if it prove not so!) one of these women took up a resolution to imitate the action of Jael upon Sisera (Mather 636; emphasis added)

ホーソーンのダスタンとマザーに対する批判的態度について、カッターは、彼がダスタンのネイティブ・アメリカンに対する暴力とアメリカの国家的

暴力、特にニューイングランドのピューリタンの過剰な暴力性を結び付け、批判を加えていると論じる。ホーソンが、セイラム魔女裁判で判事を務め無実の人々を死に追いやった自身の祖先であるジョン・ホーソンに抱いていた嫌悪感を、この騒動を支持したコットン・マザーに対しても抱いていたであろうというのだ。ホーソンにとってダスタンの暴力は、マザーを媒介としてニューイングランドのピューリタンたちの暴力性と一続きになっていた。その暴力性とは、入植と開拓に伴うネイティブ・アメリカンとの衝突はもちろん、白人コミュニティ内部で起こった理不尽な殺人、セイラム魔女裁判に象徴される (Cutter 25)⁶⁾。ホーソンにとって植民地時代から続くアメリカの暴力性は正当化されるものではなく、よって彼はダスタン、ひいては国家の暴力性の無垢さを強調するレトリックを支持することはなかったというカッターの議論を踏まえるならば、ホイットィアと対照的に、彼は国家的暴力の正当化に与することはなく、むしろそれを糾弾する姿勢を貫いたということになるだろう。

しかしながら、国家的暴力の正当化のレトリックに与しないホーソンの姿勢を手放しに肯定することはできない。なぜなら、彼はあくまでも暴力性とその罪をハナ・ダスタンという女性、すなわち逸脱的他者に集約させているという点において、ホイットィアと同様の手管を用いているともいえるからだ。彼はネイティブ・アメリカンの頭皮を剥いだハナに対して扇情的な、「血みどろの年老いた鬼女 (“the bloody old hag”）」という呼称を与え、彼女が川か沼で溺れ死んで最後の審判の日に犠牲者と対面するか、あるいは森の中で彷徨い飢え死にして、その骨が彼女の犠牲者の 10 枚の頭皮を纏わりつかせたまま野ざらしになればよいとまでいう。

Would that the bloody old hag had been drowned in crossing Contoocook river, or that she had sunk over head and ears in a swamp, and been there buried, till summoned forth to confront her victims at the Day of Judgement, or that she had gone astray and been starved to

death in the forest, and nothing ever seen of her again, save her skeleton, with the ten scalps twisted round it for a girdle! (397)

このようにホーソーンはダスタンの行いの恐ろしさを扇情的に描き、彼女を逸脱した女性としての「鬼女」に仕立て上げる。彼が描く、犠牲者の頭皮を帯びた骨だけの彼女の姿は、肉、そして白い肌を失っているがゆえに、その人種性を示すよすがをもたない。彼はこの短編を以下のように結ぶ。
 “This awful woman, and that tender hearted, yet valiant man, her husband, will be remembered as long as the deeds of old times are told round a New England fireside. But how different is her renown from his!” (397) ホーソーンは、7人の子供を守った父親トマスは「優しい心を持った勇敢な男」として、一方、復讐のためとはいえ赤子の命を奪ったハナを「恐ろしい女性」として、夫婦はニューイングランドの炉端で記憶され続けるだろうと述べる。ネイティブ・アメリカンに対して犯したハナの罪はあくまでも彼女だけのものとして描かれる。彼もまた、国家的暴力に対する個人的葛藤を語るにおいて、ジェンダー規範から逸脱した女性であり、なおかつというネイティブ・アメリカンという異人種に限りなく近接したダスタンという扇情性を帯びた他者を必要としたのである。

4. まとめにかえて——ソローの歴史的語りとオーソリティ

これまで、ホイットィアとホーソーンは、ダスタンの物語を同時代の「インディアン・プロブレム」を背景としてアメリカの国家的暴力性のレトリックに回収して捉えていたとする先行研究を踏まえつつ、その際ダスタンがいかに扇情的な他者として利用されてきたかを見てきた。ダスタンの扇情的な他者性をそれぞれのやり方で強調し、なおかつ利用していたホイットィアとホーソーンに対し、ヘンリー・D・ソローの著作『コンコードとメリマック川の一週間 (*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*)』

(1849)に収められたダスタンについての記述は、やや毛色が異なっている。ソローは、ダスタンの捕囚体験が起きたまさにその地に居る自身の現在の視点から、100年以上前の出来事に思いを馳せる。ダスタン、乳母のネフ、そしてサミュエル少年が小舟で逃走する際にたどったちょうどその川を前にして過去のエピソードを語り始めるソローの語り口は、奇妙な臨場感を帯びている。「142年前の3月31日、おそらく午後の今くらいの時間 (“On the thirty-first day of March, one hundred and forty-two years before this, probably about this time in the afternoon”）」(337)と、この出来事が確かに過去に起こったことであると示しながら、時間帯を同じくすることを読者に意識させることで、時の隔たりを超えて見せる。こうして一方では過去と現在を結び付けながら、ソローは他方でダスタンの赤子の頭が打ち付けられた木がリンゴの木であったことに言及し、さらにはミルトンの「失樂園」に言及することで、ダスタンの物語が遠い過去に起こった歴史の一部であることを改めて印象付け、物語の歴史性を強調している (Caroll 103; Derou-nian-Stodola and Levernier 176)。

The family of Hannah Dustan all assembled alive once more, except the infant whose brains were dashed out against the apple-tree, and there have been many who in later times have lived to say that they had eaten of the fruit of that apple-tree.

This seems a long while ago, and yet it happened since Milton wrote his Paradise Lost. But its antiquity is not the less great for that, for we do not regulate our historical time by the English standard, nor did the English by the Roman, nor the Roman by the Greek. (Thoreau 340-41)

キャロルも指摘するように、ソローはダスタンを役者とし、自ら脚色を加えた歴史を語ることで、「歴史の伝達者 (“historical informant”）」としての権

威を手に入れる (Caroll 107)。マザーがそうしたように、一人称で語ることでできなかった女性の体験を語り直すことで、ソローは発言権を持ったオーソリティとして歴史を語ることができた。そしてダスタンらが慣れない手で漕ぐ「カヌーの船尾に置かれた 10 人の先住民の頭皮からは未だ血が滴り落ちている (“at the bottom of their canoe lay the still bleeding scalps of ten of the aborigines”）」(338) と、あたかもその場に居合わせたかのように過去の出来事を彼が語る時、その臨場感を担保しているのは、「未だ血が滴り落ちている」ネイティブ・アメリカンの頭皮という極めて扇情的な小道具である。

しかし、その扇情性はあくまで小道具としての頭皮に集約されており、ホイットィアやホーソーンとは違い、ダスタン本人の行いについての描写は極めて抑制的である。それどころか、捕獲者の一行を襲撃したのはダスタン一人ではなく、ともに拉致された乳母と少年と協力して行ったことが明記されている。“On the morning of the 31st she arose before daybreak, and awoke her nurse and the boy, and taking the Indians’ tomahawks, they killed them all in their sleep, excepting one favorite boy, and one squaw who fled wounded with him to the woods” (338)。血塗られているのは三人全員の衣服であり、ネイティブ・アメリカンを殺し頭皮を剥ぐという行いは「疲れ切った女性たちと少年 “these tired women and this boy”」(339) によるもので、逸脱的「鬼女」ダスタン一人の所業ではない。“Early this morning this deed was performed, and now, perchance, these tired women and this boy, their clothes stained with blood, and their minds racked with alternate resolution and fear, are making a hasty meal of parched corn and moose-meat, while their canoe glides under these pine roots whose stumps are still standing on the bank” (339)。ソローの語りについても一つ特徴的なのが、ホイットィアやホーソーンはダスタンの逸話を語るにおいて、大枠ではマザーの記述や参考資料としての木版画を踏襲していたのに対し、ソローは独自の視点からダスタンら一行の辿った事の成り行きを語っているという点である。前述のとおり、ソローは時系列

を入れ替え、最初に犠牲者の頭皮とともに逃亡者3名がカヌーで川を行く情景からダスタンの逸話を語り始める。加えてソローは、尋常でない経験をした3名の心情を描きこむ。彼らは復讐心に突き動かされ敵に仇をなし意気揚々と帰途についたのではなく、逃亡に成功した後も、別の敵の影や自らの犯した行いそのものに怯える。“They are thinking of the dead whom they have left behind on that solitary isle far up the stream, and of the relentless living warriors who are in pursuit. Every withered leaf which the winter has left seems to know their story, and in its rustling to repeat it and betray them” (339)。こうして、ソローは過去の出来事を記録するにとどまらず、ダスタンという女性を襲った出来事についての物語を再創作している。ソローは、ダスタン個人を扇情的な他者にしたてあげる代わりに、ダスタンの体験自体の扇情性に誘発されて、自らの手による扇情的な物語として語り直したのだ。

ダスタンは、彼女が捕囚体験を通じて、ジェンダー規範の逸脱及び人種の境界の疑似的越境行為を犯した17世紀の女性であったことに加え、本人による語りが残らなかったがために、いわば二重の脆さ(vulnerability)をはらみ、オーソリティを持った語り手の再話においていかようにも利用可能な他者として扱われた。それゆえに、一連の再話は、時代の要請に応え、あるいは自らの個人的葛藤を解消し、また発言権を持つ者としてのオーソリティを確固たるものにせんとする語り手の欲望をあぶり出す。とはいえ、ダスタンは、自身の声を残すことこそできなかったものの、後世の語り手に語り直しの試みへと欲望を煽るその脆さによって、再話という形で後世へと受け継がれてゆくことになったこともまた確かである。ここに、彼女の物語の逆説的な力強さを見出すことができる。ダスタンが他者という存在へと疎外される要因となった彼女の逸脱・越境行為は、同時に彼女の体験に扇情性をもたらした一番の要因でもある。読み手の関心を煽る扇情性は、同じく語り手の、語りへの欲望を掻き立てる。この意味で、扇情主義こそアメリカ文学史を駆動させる動力源であるといっても過言ではない。

Notes

- 1 ネイティブ・アメリカンによって捕囚とされた者による体験記は伝統的に「インディアン捕囚体験記 (Indian Captivity Narrative)」と呼びならわされてきた。アメリカ大陸の先住民に対し「インディアン」という呼称を用いることは近年不適切とみなされているが、本稿では、当該文学ジャンルについては慣例に従い「インディアン捕囚体験記」と表記することを断っておく。
- 2 フィードラーによる第二の神話の定義は以下のとおりである：“The second is *The Myth of the White Woman with a Tomahawk*, the account of Hannah Duston, a New England lady who, snatched out of childbed by an Indian raiding party, fought her bloody way to freedom” (51)。
- 3 19世紀におけるダスタン・リバイバルともいえる状況をカッターは以下のように記述している。“In the 1820s, she began to return to a central place in American culture, and remained there through the 1880s. Her story appeared in an immense variety of published materials: children’s books, virtually every major history of the United States, Indian histories, histories of women, magazines, biographical compendiums of famous Americans or famous women, travelers’ guidebooks, gazetteers, and ‘cyclopedias’ of general information” (Cutter 14)。
- 4 その他の資料では、ダスタンとともに捕らわれたのは未亡人で乳母のメアリー・ネフであるとされているが、ホイットティアは召使の少女 (“her servant girl”) と記述している。
- 5 加えてバーナード・コーエンは、ホーソンが執筆の際に参照したとされるB・L・ミリック著『マサチューセッツ州ヘイヴァーヒルの歴史』(1832)に引用されている、ダスタン氏をたたえるサラ・J・ヘイル (Sarah J. Hale) の詩「父の選択 (“The Father’s Choice”)」に影響を受けた可能性を指摘している (Cohen 239–40)。
- 6 作家の祖先ジョン・ホーソンのセイレム魔女裁判への関与を指摘しながら、カッターはホーソンの中で、ダスタンの暴力性がマザーを介しニューイングランドのピューリタンのそれと結び付けられていた可能性を以下のように論じている：“Hawthorne’s attitude toward Duston and Mather illuminates the connection between Duston’s violence and the nation’s violence, Hawthorne depicted Duston’s violence as excessive and linked it with the excessive violence of New England Puritans. He was ashamed of the violent past of the Puritans in general and of the role that his own ancestor, John Hathorne, played in this violence by serving as a judge at the Salem witchcraft trials. Much of his dislike of Mather can be linked to Mather’s

role as an apologist for the Salem trials. For Hawthorne, Duston and Mather were manifestations of Puritan violence that resulted from superstition and bigotry, rather than the legitimate defense of the nation” (25)。いうまでもなく、ホーソーンが、魔女裁判に与した祖先によって自身に背負わされた過去の重みを『七破風の屋敷』(*The House of Seven Gables*, 1851) に描きこんでいることはよく知られている。

引用文献

- Arner, Robert D. “The Story of Hannah Duston: Cotton Mather to Thoreau.” *American Transcendental Quarterly*, vol. 18, 1973, pp. 19–23.
- Carroll, Lorraine. *Rhetorical Drag: Gender Impersonation, Captivity, and the Writing of History*. Kent State UP, 2006.
- Cohen, B. Bernard. “The Composition of Hawthorne’s ‘The Duston Family’.” *The New England Quarterly*, vol. 21, no. 2, 1948, pp. 236–41.
- Cutter, Barbara. “The Female Indian Killer Memorialized: Hannah Duston and the Nineteenth-Century Feminization of American Violence.” *Journal of Women’s History*, vol. 20, no. 2, 2008, pp. 10–33.
- Derounian-Stodola, Kathryn Zabelle and James Arthur Levernier. *The Indian Captivity Narrative, 1550–1900*. Twayne, 1993.
- Fiedler, Leslie A. *The Return of the Vanishing American*. Stein and Day, 1968. 渥美昭夫・坂本雅之訳『消えゆくアメリカ人の帰還』新潮社, 1972年。
- Hawthorne, Nathaniel. “The Duston Family.” *American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*, vol. 2, 1835–1836, pp. 395–97.
- Mather, Cotton. *Magnalia Christi Americana: The Ecclesiastical History of New England from Its First Planting in 1620, until the Year of Our Lord 1698*. 1702. S. Andrus & son, 1853.
- Minter, David L. “By Dens of Lions: Notes on Stylization in Early Puritan Captivity Narratives.” *American Literature*, vol. 45, no. 3, 1973, pp. 335–47.
- Namias, June. *White Captives: Gender and Ethnicity on the American Frontier*. U of North Carolina P, 1993.
- Thoreau, Henry David. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. James Munroe, 1849.
- Whittier, John Greenleaf. *Legends of New England*. Hanmer and Phelps, 1831.
- 巽孝之『アメリカ文学史——駆動する物語の時空間』慶應義塾大学出版会, 2003年。
- . 「環大陸のアメリカ文学史のために——コメンタリーに代えて」『アメリカ文学』第79号, 2018年, 39–47頁。